

「言葉に宿る権威」
マルコによる福音書 1章 21～28節

カファルナウムという町で、イエスさまは安息日に会堂に入って教え始められました。その教えに人々は非常に驚きました。「律法学者のようにではなく、権威ある者としてお教えになった」からでした。

では、イエスさまの教えは、律法学者の教えとは何が違ったのでしょうか。律法学者たちは、旧約聖書の律法を守ることによって救われると思っていたのです。そのために必死になって律法を正しく解釈し、それを徹底して守ることをしていました。しかし、そのことによって彼らは、そうすることが出来ない人を罪人とさげすんでいたのです。ですから、そこにあるのは強制と義務であり、自由と喜びはありませんでした。

しかし本来、律法は、神の恵みに応えて歩んでいくために与えられたものです。律法は神の言葉であり、神の御心です。私たちに御心に従って生きる喜びを与えるものです。イエスさまの教えは、忘れられてしまった神の御心を思い起こさせる、神ご自身の権威に満ちたものでした。

神の権威によって、神ご自身が私たちに語りかけられるとき、神の言葉は、圧倒的な力をもって私たちに迫ってきます。そのとき、汚れた靈に取りつかれた男が叫び出しました。「ナザレのイエス、かまわないでくれ。我々を滅ぼしに来たのか。正体は分かっている。神の聖者だ」と。この「かまわないでくれ」と訳されているところは、直訳すると、「やめろ、ナザレのイエス。お前と私たちと、なんの関係があるというのか」となります。簡単に言えば、「関係ないじゃん、ほっといってくれよ」ということです。

「関係ないじゃん」。私たちにも自分の思いを優先させて神さまを拒んでしまう心はないでしょうか。ここで「汚れた靈」と言われているのは、単に昔の人々が考えていた様々な病気を引き起こす悪いものということだけではありません。人を神から引き離そうとする力、神に敵対する力のことです。神の言葉によって、あなたはこのままでよいのかと問われ、救いへの招きが語られる時、神の御心に反発し、それを否定しようとする思いが私たちの中にも起こつくることがあるのです。

しかし、イエスさまは、この汚れた靈をそのままにはしておかれません。イエスさまは言われます。「黙れ、この人から出て行け」と。そして、その神の恵みの支配を実現するために、キリストは一人十字架に赴かれたのです。神を否定しようとする人間の罪と戦われたのです。そのことによって、どんな人も、神の愛の中にあって生かされていくことが明らかにされていくのです。

カファルナウムに入って来て、会堂で教えられたイエスさまは、私たちの礼拝においても権威ある言葉を語られます。もしかしたら、私たちの心は、様々な靈によって支配され、心騒がせているかもしれません。私たちのもとに来られる方の支配を望まず、その愛を拒むのかもしれません。しかし、主イエス・キリストは、それを上回る言葉で語られるのです。「黙れ、この人から出て行け」と。この権威ある主の教えを聞きつつ、世にあって神の支配を知らされた者として歩んでいきたいと願います。